觀心と觀佛

稻葉圓成

○

觀經に明された觀法が觀心であるか觀佛であるかに就て古來多くの議論が戰された。天臺の觀經疏には心觀爲宗といひ淨影は觀佛爲宗といつて居る。而して天台疏の心觀爲宗を高唱して觀佛爲宗を排したは宋の四明智禮である。『妙宗鈔』一部の所明がそれである。別に唐の善導は觀佛爲宗亦念佛爲宗と判じてどこまでも觀心の理觀を排して觀佛の事觀を力說して居る。亦四明より凡そ百年後宋の元照は淨影善導によりて觀佛爲宗を觀經の正意とし、之に對して四明門系の道因は觀心爲宗を相承して居る。今述べやうとするのは四明を中心とした觀心觀佛の論爭の要旨であるが、それに先ちてこの問題の性質に就いて討ねやう。取り來つた問題は觀經の宗體論であるが、それに顯さうとするものは、それを論ずる人々の自分自身中の中心思想である。卽ち自己の道を觀心に於て見出すか觀佛に於て見出すかといふことが、やがて觀經を見る態度に觀心と觀佛との別が生じてくるのである。

七九

觀心は一切の問題を自己の內心によつて解決せんとする者の態度である。觀佛は大自然の中に問題解決の鍵を捉まんとする者の態度である。よつて前者は起信論の如き又唯識論の如く唯心論的の態度であり、後者は中論の如き實相論的の態度といふべきである。而して同じく「心」に基調を置くにしても、「心」を觀念的な心を見て行く者と現實的な心を見て行く者とがあるわけである。四明が山外の眞心觀に對して妄心觀を主張したのは卽ちそれである。山外派の人々は「心」は非迷非悟の眞如心である。これが迷へば衆生となり悟れば佛となる。迷悟は事實の世界であるが、その事實が眞實性を持ちて居ることは事實そのものゝ上に之を認むべきではなく、その事實をして事實たらしむる能造の原理たる非迷非悟の眞如心が唯一の眞實である。然れば一切のものをこの原理の下に修正し還元しなければならぬ。われ〳〵の無明煩惱の心はこの原理に背きこれを虐げるものであるから、この現實の心を棄てゝ、この現實の心の內に潛める淸淨無垢な原理そのものに還歸しなければならぬ。われ〳〵の前に明にし觀照し行かなければならぬものはこの心性である不可思議心であるといふのである。これに對して四明は妄心觀を主張して、無明煩惱の心そのものを觀照の對象とせねばならぬ。この現實をどこまでも棄てずに握りしめて行く所に、そこに眞實が顯彰されるのである。山外の人が妄心を棄てゝ眞心を觀ずるといふが、さういふことは實際不可能事である。言ふ所の眞心といふのはどうしてわれ〳〵に觀照されるか、何が眞心であるか。その眞心も亦妄心所現の眞心であつ

て概念的な眞如に過ぎぬではないか、われ〳〵はこの現實の妄心を離れては何者も識得することは出來ない。眞心が一切諸法を能造する原理ではなくて妄心が一切諸法の眞相をわれ〳〵の前に開顯する鍵である。この鍵を捉むことによつて迷と悟とが明に其相の全體をわれ〳〵の前に投げ出す。それが事實の世界であると同時に原理の法界である。されば原理は妄心の上にのみ體驗さるゝもので、妄心を棄てゝ初めて原理があるのではない。故に要はこの現實の妄心を觀じてそこに絶對の原理を實證することである。されば非迷非悟の能造の原理としての「心」といふようなものは、單に抽象的な名字のみの假想に過ぎない。さういふ觀念的な心性を逐つて居つたならば、永劫に生命の原理に到徹することは出來ない。芥爾陰妄の一心こそわれ〳〵を久遠の生命に結びつける唯一の契機であると。どこまでも妄心觀を主張するのが四明である。

次に觀佛にも亦同じやうに二つの思想が同じ名の下に許され得る。卽ち觀念的な佛を追求するものと、現實的な佛を觀照するものとである。このことは既に元照の觀經疏上十三に認めて居ることで

古德有言觀佛有二、一者自心三昧所見佛二者西方從因感果佛、諸經觀心卽觀自心所見佛也、今十六觀正觀西方感果佛也

といつて居る。尤も元照は觀心家の佛がすべて觀念的な佛で觀佛家の佛が現實的な佛として居るが、必ずしもさうではない。卽ち超經驗な不可思議尊を盲目的に受け入れ、若くは自然法の原理と

しての佛(單なる理佛)を以て佛の全體と考へる場合に於ても、亦それが抽象的な點に於て觀念的な佛である。かういふ佛の前に現實の自己は少しも考の中に入れてはならぬのである。卽ち現實の世界から全く眼を閉ぢる時に承認さるゝ佛である。元照の所謂定中所見の佛である。是に對して修因感果の佛は苦惱の有情を棄てず原理の一如の世界から現實相對の世界に相を示現した現實的な佛である。この佛は非迷非悟の原理に心を遊ばしむる時に見奉ることは出來ないで迷悟相對の事實に眼がさめた時に値ひ奉るのである。現實の自己の上にひた〳〵と觸れることの出來る佛である。無明煩惱から離れるかはりに無明煩惱の心に當面する時にそこに顯現し實證さるゝ佛である。捨家棄欲の出家によつて初めて見出さるゝ佛は前者で在家止住の輩によつて仰信さるゝ佛が後者である。

以上は觀心と觀佛の語に含まるゝ意味を叙べたのであるが、現實的な心を觀照するものは單な原理に止まらずに、そこに動的な生命を實證するものであるからやがて、現實的な佛を觀照する觀佛者がやがてそこに現實的な心を把握して行くのと同じ結論に到達するのであるが、これは決して一緒にすべきではない。何となれば前者自己を出發點として佛を發見したのであるから自己をどこまでも捨つることが出來ない。よつてその佛は心によつて生み出された佛である。又後者は佛を出發點として自己に逢着したのであるから、どこまでも佛のみが眞實であつて、自己はその佛によつて生み出されたものである。卽ち前者が唯心の彌陀己身の淨土といふことが大切であるに對して、後者は

唯佛是眞でそこに何等の但し書もなしに受け入れられたものである。唯心も己身もすべてこれ世間虛假なれば悲痛し慚愧すべきものにすぎぬ。そこに現實的といふことが共通であるとはいへ「心」が眞實か「佛」が眞實かといふことは、どうしても實證の上に於て相容れない二つのものである。然れば自己の上に佛を發見する觀心と佛の上に自己を發見する觀佛とは自體相諍はねばならぬ運命の下に置かれたものである。人間によつて創造された神と神によつて創造された人間とは決して同じ實質を有する異れる語ではない。

○

『淨土境觀要門』によれば四明門下の廣智と淨覺が觀經の觀法に就て論諍をした。廣智は攝心歸佛であると主張するに對して淨覺は攝佛歸心であると力說した。これ明に廣智の觀佛論者であるに對して淨覺は觀心論者であつたのだ、然るに四明は其のいづれをも破して約心觀佛であると骨張したといふ。『妙宗鈔』一部に叙べられたのがそれである。（このことは『無盡燈』二四ノ一の拙稿「四明と淨覺」に簡短に叙べて置いた參照されたし）約心觀佛とは要するに心所具の佛を觀ずるといふことで。觀心の外ではない。そして廣智のいふやうな直ちに佛を觀ずるのは佛境界は高くして遠ければ容易なことではない。さればとて淨覺のいふ如く直ちに心を觀ずるのでもない。直ちに心を觀ずるのは、觀經十六觀の所詮ではない。觀經の所詮は是心是佛是心作佛にある。この心の上に佛を觀照

するのであるといふのが四明である。併し淨覺の攝佛歸心といふのもやはり佛も心の外にないといふことであるから心の上に佛を發見することであつて四明の主張と別に異なる點がないではないかといふに。然らず。少くとも左の點に於いて兩者の相異を見るべきである。

「心」の意味に於て淨覺は原理としての心を考へて居る。四明は現實的な心を指すのは常の如くである。淨覺は原理としての心を考ふるが故に攝佛歸心といふ。卽ち佛は衆生と對立した相對世界の事相である。心は迷悟の對立を絶した原理そのものであるから、佛は衆生と共に其存在の第一原理は心の上に持つて居る。全體的な佛を捉むものは佛の事相に眩惑されないで、一如法界の一心に融け合ふて了ふ所に於て實證さるゝのである。この故に佛は假の相である心は眞理そのものである。故に佛は心に攝歸し還元さるべきである。これ明に淨覺が山外眞心家に相通ずる所である。山外の人々が心を能造の原理として佛衆生は所造の事相とすると同じ。これに對して四明は心は迷の事相である。併しそこには久遠の生命が流れつゝある。卽ち念々に佛がそこに生み出され行き、亦衆生の迷の全體が見照されて行く不可思議の心である。心が工畫師といふのはかういふ意味に於て實證さるゝのである。卽ち迷と悟との事實が全體であつて、その全體の上に生命の原理が流れつゝあるので、迷悟の外に非迷非悟の抽象的原理はあり得べきではない。四明がかういふ立場から是心是佛を解して約心觀佛を說くのであるから、淨覺の攝佛歸心とは同日に論ずべきではない。

次に亦「佛」に就ての考へ方は兩師の間に懸隔がある。その事は拙稿『四明と淨覺』（無盡燈二四ノ四）に詳しく叙べて置いた通り、佛の本質は法身の原理にあるので、報身佛や應身佛はその原理が相對の世界に顯れた影像に過ぎないとする法身佛中心說である。この考が攝佛歸心を主張せしめたのである。卽ち佛に接し佛を觀るには佛の相好莊嚴の假相に囚はれて置つてはならない、それらの粉飾を去つて直ちに一如法性に證入することである。そしてその一如はわれらの本心そのものであるから、眞實の觀佛は觀心に於て初めて成立つのである。卽ち佛も其本質は心に外ならぬ。かやうに淨覺は「佛」を心によつて局分して考へるのである。暴流の如く奔馬の如く流轉して行く現實の心の上に悲智の火花を散す全體的な佛に就ては何等の理解をもつて居らぬ。これに對して四明は佛を原理の下に統攝せしめて考へてはならない、寧ろ佛の本質は悲智に認むべきである。悲智は法身佛ではなく報應二身の所有である。そして悲智は迷苦に流轉する衆生の上にのみ注がるゝもので從つて迷悟相對の世界に於て實證さるゝ。非迷非悟一如の法界には悲智は存在を許されぬ。尤も悲智が迷悟對立の世界に於て迷悟を融合せしめた、いはゞ二の世界は卽した一の世界である。かういふ意味に於て報應二身の上に法身の全體が味はるゝのであるから元より法身を棄てるのではない。されば四明の佛といふのはかういふ具體的な現實的なものであつて、われらの心はかういふ全體的な佛を受け入るゝのであつて、淨覺のやうに心によつて佛を律しやうとするのではない。よつて淨覺の觀

心の志す所は生佛一如の一心になることであるが、四明の觀心の志す所は全體的な佛を觀開かうとする所にある。卽ち是心是佛は淨覺に於ては唯心になり切つた所それが佛であるといふ意味であるが、四明の意に從つて解せば心の當體に佛の全體を見出す意である。淨覺は佛(報應二身)を方便にしてやがて眞實に歸した場合には取り去られねばならぬ方便と考へるに對して四明は佛(報應二身)は方便なれどその方便にあらずんば眞實を顯すことの出來ない、從つて方便は棄て去ることの出來ないものと考へるのである。こゝに攝佛攝心と約心觀佛の相異が存する、之を要するに四明と淨覺は共に心を觀ることによつて佛を發見せんとする觀心家であるけれど、淨覺が無明煩惱の心をすてゝ心の本體たる原理を捉まんとするに對して、四明は無明煩惱の心をしつかりつきとめてそこに佛そのものを見證せんとしたのである。

○

元照は四明に後るゝこと約百年の出世であるが、その『觀經義疏』に於て其經宗を論ずるや天台疏の心觀爲宗をすてゝ淨影善導等に從ひて觀佛爲宗を取つて居る。これに對して四門々下の道因は天台四明の心觀爲宗に据つて『輔正解』を作り元照疏を破した、元照の弟子戒度は『扶新論』を書いて『輔正解』を難破し別に『正觀記』を作りて師說の觀佛爲宗の旨を力說して居る。これ宋朝に於ける第二の觀心觀佛の論諍である。今その論諍の跡は審にするの煩を避けて元照戒度の觀佛爲宗の要旨に

就いて一言しやう。元照は觀心と觀佛とを分けて餘經に說ける觀心は此方入道斷惑證理の至要であり觀經に說かれた觀佛は往生淨土修因感果の最優であるとし、この二の觀法に六別を數ふ卽ち左の如し。

一、攝レ想歸レ心　送二心他境一。　二、不レ局二四儀一　要須二正坐一

三、不レ拘二方所一　定須二西方一　四、不レ簡二餘時一　須レ除二便食一

五、斷レ惑證レ理　成レ業感レ生　六、魔業發現　聖德護持

こゝに觀心は此方入道、觀佛は往生淨土と聖淨二門に分判して、又觀心は斷惑證理、觀佛は成業感生と分對して批判したる所に元照自らの態度を見るべきである。卽ち斷惑證理といふ論理的な道によつて到底救はれない彼自らを自覺し、畢竟それは沙上に樓閣を打ち建つるやうなものであると知られた時に觀心が救の道にあらずと廢てさらざるを得ない求道者の心理的推移を示すものである。そこに內にばかり向いて居つたものが外に眼を轉せざるを得ない一轉機が畫せられたのである。思惟冥想の自負的態度から聞法信受の謙抑的態度へ移り行き、更に靜寂な觀念の床を出でし動的な願求の旅に出で立たなければならぬ魂の湧躍を感じたのである。それが斷惑證理から成業感生又此土入證より他土得證へ推移する求道者の心理的經過である。又觀心に魔業發現といふに對して觀佛に聖德護持を數へたる處に、か弱い人間性の曝露が到底觀心に止住することの出來ないことを示し、

須正坐、須西方、除便食を擧ぐる處に、すなほに敎に隨順してそこに批判の刄を向け得ない求道者の敬虔な態度を見るべきである。

而してこの元照がその祖四明（元照は四明の孫弟）に背いて觀佛爲宗を力說した心理的推移は、彼自らが『淨業禮懺儀序』（樂邦文類二十八丁所輯）に叙べて居る。それによれば元照は初め天台神悟處謙の門に遊んだ當時にありては「この娑婆惡世に於て佛理に通達して大導師となりて群生を提誘せん」との勇ましい此方入道斷惑證理の智者であつたばかりでなく、於二淨土門一略無二歸向一見レ修二淨業一復生二輕謗一の往生淨土の道に於て無理解であつた。然るに後重病に罹りしがその時平生の勇ましい志願は何等の救濟を與へなんだ。因つて、飜然として先非を悔ひそれより盡棄二平生所學一專尋二淨土敎門の人となられた。そしてもはや昔の如き夢のやうな憧憬を持つことのかはりに、自らの無量の罪業謗正法の業因の恐ろしさに戰く凡愚人で、業性本來空といへる論理は之を破ることが出來ないとしても、これら惡業の報を否定することは出來なかつた、そこで內懷二慚恥一曉夕兢惶する敬虔な求道者としての晩年の元照が生れたのである。

四明は現實の心を見つめる所に佛を觀るのだといつたが、それがそのまゝ元照にとりては夢のやうな憧憬に過ぎないので、現實の穢い心がほんとうに實證されたものが、どうして其心の奧に唯心の彌陀の實在を信ずることが出來やう。これが元照が四明に對する最も力强い反抗であつた。そし

て觀心から觀心へ移り行く契機である。而して又聖道門の破綻がこゝに胚胎する。併し元照がどこまで觀佛といふことを深く味つて居たか。もとより元照は「晨夕念々に想を彼方依正勝境に繫げ熾然として生を求むる」熱心なる西方願生の行者であつた。又我彌陀は名を以て物を攝す耳に聞き口に誦する處に無邊の聖德を現實の識心に味ひ得た名號信受の行者であつた。併し三昧所現の極樂の依正を嘆美し觀念稱念の行業に功德利益を認むる功利的な往生人たることは否定することは出來ぬ。要するに觀念的な佛に憧憬し物質的な淨土を歎美する求道者の域を脱し得なかつたことは、彼の著書に於て之を否定することが出來ない。觀念的な佛を嘆美する態度から現實的な佛を實證して行く態度への進展は、やがて外的な佛の依正より直に內的な佛心に深く入つて行くのである。觀佛爲宗から一轉して本願爲宗になる所に觀佛の徹底的實證が存する。本願爲宗の顯彰は觀心から觀佛へ推移し行く敎理史の結論として味ふべきことであるが、今はそれに言及せずに筆を擱き、更に稿を改めて是正を仰ぐことゝせん。